

〈原著論文〉

探求学習を活用した終末期ケア教育に関する看護学生の学び

Learning of the nursing students about end-of-life care using inquiry-based learning

中尾 友美¹, 石井 あゆみ², 隍 智子³

要旨

目的：本研究の目的は、終末期ケアに関する講義において探求学習を取り入れた結果、学生がどのような学びをしたのかについて明らかにすることである。方法：看護学科4年生で「ターミナルケア論演習」を履修し研究同意の得られた27名が記述した課題レポートから、学生の学びを抽出し、質的帰納的に分析した。結果：終末期ケアについて探求学習を取り入れた学習をすることで、学生は、【患者や家族に必要なケア】や【医療者に必要な心構え】を学ぶと同時に、自己の体験を振り返り再学習するといったような【学びの発展】も行っていった。考察：看護学生における探求学習は、知識の獲得だけではなく、知識を活用する力や、倫理観の獲得、学習意欲の喚起や主体性の促進といった効果につながっていたと考える。

キーワード：終末期ケア, 看護学生, 学び, 教育, アクティブラーニング
end-of-life care, nursing student, learning, education, active learning

I. 緒言

近年、地域包括ケアが推進され、住み慣れた地域で最期を迎える人々が増えつつある。それに伴い、終末期医療における看護師の担う役割も幅広くなっている。看護学士教育においては、看護学士課程教育のコアコンピテンシー（日本看護系大学協議会, 2018）に「エンドオブライフにある人と家族を援助する能力」として、終末期ケア教育の必要性が示され、各大学において終末期看護に関する講義や演習、実習などの教育が行われている。

一方、学校教育について、文部科学省は、「実社会や実生活の中でそれら（基本的知識や技能）を活用しながら、自ら課題を発見し、その課題の解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、更に実践に生かしていけるようにすることが重要である（文部科学省, 2017）」とし、大学教育においてもその必要性が言われている。つまり、学生に知識を与えるだけではなく、培った知識を活用できるような思考力や判断力、表現力といった総合的な力をつけることが望まれている。その手法の一つとしてアクティブラーニングがあり（羽田, 2017）、教員による一方向的な講義形式

の教育とは異なり、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法の総称と定義されている。

終末期ケアにおいても、終末期にある患者を実習などで受け持つ機会は少ないものの、「他の学生の体験や看護職者の体験を共有することで、知識を実際に活用する方法を追体験的に学べるように教育的工夫をすることも重要である（日本看護系大学協議会, 2018）」と述べられているように、知識の提供だけではなく実践で活用できるような教育が望まれている。終末期ケアに関する教授法の報告では、看護学生に対しシミュレーションを活用した教育を実施したり（犬丸ら, 2018）、終末期医療の意識がつくように、VTRの視聴を試みる（森, 2019）といったことを実施している。また森ら（2017）は、実習において、講義とシャドウイングを併用した手法を取り入れることで、がんと共に生きる人と家族に対する看護の基本的な姿勢を学生が学べたと述べている。このように、多様な方法でアクティブラーニングを取り入れた試みを実施されている。

本学における終末期ケアの教育は、4年生の選択科目として、“ターミナルケア論演習”を実施し

1 Tomomi NAKAO 千里金蘭大学 看護学部
2 Ayumi ISHII 千里金蘭大学 看護学部
3 Motoko HORI 千里金蘭大学 看護学部

受理日：2019年9月6日
査読付

ている。その中で、2019年度は、学生の主体的な学びを促進するために、学生が自ら課題や学び方を考え計画し、成果を発表するという探求学習（小林ら, 2018）を行った。今回は、その科目内で記載したレポート結果から、学生の学びについて考察し、今後の教授法に役立てることとした。

II. 目的

本研究の目的は、終末期ケアに関する講義において探求学習を取り入れた結果、学生がどのような学びをしたのかを明らかにすることである。

III. 研究方法

1) 対象

看護学科4年生で「ターミナルケア論演習」を履修した30名に、授業の一環として探求学習を実施し、同意の得られた27名が記述した課題レポートを分析対象とした。

2) 探求学習の方法

探求学習とは、アクティブラーニングの一つであり、「自らテーマを設定し、情報を収集し、その情報を整理・分析し、最終的に自らの考えなどを論述する学習活動」とされている（小林ら, 2018）。まず、学生が問いを設定できるように、ターミナルケアについて教員から講義を実施した。講義内容は、急性期看護、慢性疾患看護、老年看護、周産期看護、小児看護、在宅看護、精神疾患看護の

各領域におけるターミナルケアの実際や課題についてとした。次に、講義の内容を参考に、学習したいテーマと学習方法についての計画書を学生に作成してもらった。計画書に基づいて、グループ学習をするか個人学習をするかについても学生に選択してもらった。ただし、学生同士の学びを促進するために、個人ワークを選択した学生についても、個人学習を実施している者でグループを作り、お互いにどのような学習をしているのか共有する機会を持った。学習の実施中は、進捗状況を教員が確認し、必要に応じてアドバイスをし、成果の共有として、グループ毎に発表する機会を持った（表1）。グループ発表終了後に、取り組んだ課題とそこから得た学びについて3000字程度の課題レポートを記載してもらった。

3) 分析方法

学生が記載したレポートを繰り返し読み、「実施した課題」と「課題に取り組むことで得た学び」に関連する箇所を選択した。次に、「実施した課題」について類似性からカテゴリーを作成した。「課題に取り組むことで得た学び」については、類似性からサブカテゴリーを作成し、抽象度を上げて類似性を再検討しカテゴリーを作成した。また、作成したカテゴリーについてさらに抽象度を上げ、大カテゴリーを作成した。分析にあたっては、研究者3名で考えが一致するまで検討をした。

4) 調査期間

調査期間は、2019年4月～8月である。

表1：学習内容

学習内容	形式
<ul style="list-style-type: none"> ・ 終末期ケアの概要 ・ 各領域における終末期ケア (慢性疾患看護、急性期看護、老年看護、周産期看護、小児看護、精神疾患看護、在宅看護)	講義 講義
<ul style="list-style-type: none"> ・ 課題を設定し学習計画書を作成する ・ 計画書をもとに学習を実施する 	演習 演習
<ul style="list-style-type: none"> ・ がん性疼痛看護認定看護師の講演：がん患者の終末期ケアについて ・ 慢性疾患看護専門看護師の講演：非がん患者の終末期ケアについて (講師とのディスカッションを含む)	講演 講演
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習成果の発表 	グループ発表と ディスカッション

5) 倫理的配慮

本調査は、千里金蘭大学疫学倫理委員会の承認を得て実施した(2019-08)。対象者には、研究の主旨、研究参加拒否による不利益はないこと、データは匿名化することなどについて、文書と口頭で説明をした。

IV. 結果

1) 学生が実施した課題

学生が実施した課題は4つの内容があった(表2)。「日本と海外での終末期ケアの比較」をテーマにした学生は、グループで取り組みを実施した。先行研究から日本と海外での終末期ケアについて調べたが、さらに具体的なケア内容を知りたいと希望があったため、終末期ケアを実践している慢性疾患看護専門看護師とがん性疼痛看護認定看護師に講演を依頼した。時間は各90分とし、講演が60分、学生と講師のディスカッションを30分とし2日間で設定をした。学生の希望を聞き、講師への依頼は教員が実施し、当日の講演会の運営や学生と講師のディスカッションの運営については学生が実施した。また、講演は課題を提案したグループ外の学生も聴講できるようにした。

先行研究を調べ、終末期ケアの現状と課題について学生間で意見交換をした学生は、先行研究の調査を個人で実施した学生とグループで実施した学生がいた。個人で先行研究の調査をした学生は、小児を対象を当てて調べた学生と、家族支援について調べた学生がいた。個人で調べた学生も、グループを作り調べた内容を発表し合い、学生間で意見交換をした。

エンゼルケアの演習を実施した学生は、グループで取り組んだ。書籍や先行研究を調べ、エンゼ

ルケアの手順や変遷についてレポートを作成し、エンゼルメイクについて演習を実施した。演習室の予約は教員が実施したが、演習に必要な物品の準備や演習スケジュールの作成などは学生が計画をした。演習には、担当教員2名も参加をした。

終末期ケアに関連する映画を鑑賞した学生は、2つのグループで実施していた。鑑賞した映画の内容は、終末期医療に携わる看護師に焦点を当てたものと、患者に焦点を当てたものがあった。映画の選択には、学生間で検討することに加え、ターミナルケア論演習の講義を担当した教員に相談をし、適切なものを選べるようにしていた。また、学生間の意見交換では、学生自ら、医療者としての視点が含まれるように意識していた。

2) 課題に取り組むことで得た学び

「ターミナルケア論演習」を受講後のレポートの記述から、226のデータを抽出し、24個のサブカテゴリと7つのカテゴリを抽出し、3つの大カテゴリに集約した(表3~5)。以下、カテゴリについて述べる。【】は大カテゴリ、『』はカテゴリ、《》はサブカテゴリを示す。

(1) 患者や家族に必要なケア

【患者や家族に必要なケア】には、『家族ケアの必要性』と『他者との学びから得た終末期ケア技術』という2つのカテゴリが抽出された。『家族ケアの必要性』には、《家族とも信頼関係を築く》、《家族の介護負担を知り緩和する》、《家族の気持ちを支える》、《患者と家族をつなぐ》という4つのサブカテゴリがあった。家族支援の必要性は他の看護学領域でも学んでいるが、家族が抱える困難について具体的に知ること、看護師としてどのように関われば良いか考える機会になっている。

表2：学生が実施した課題容

課題	学生数
「日本と海外での終末期ケアの比較」をテーマに、先行研究を調べると共に、日本で実施されている看護については実践者から話を聞いた※	5
先行研究を調べ、終末期ケアの現状と課題について学生間で意見交換をした	6
エンゼルケアについて手順や注意点を調べた後、演習を行い、グループで学びについて意見交換を実施した	7
終末期ケアに関連する映画をグループで鑑賞し、鑑賞後に医療職者としての視点を踏まえ、意見交換を行った	9

※実践者は終末期ケアを実践している慢性疾患看護専門看護師とがん性疼痛看護認定看護師であり、対象学生全員に講演を実施した

例えば、家族も患者と同様に不安を抱えていることや、深い悲しみがあることを知り、信頼関係を築くことの重要性に気が付いている。また信頼関係を築く方法として、家族支援も自分達の役割であることを家族に伝えていくことや、何気ない日常会話も大切であることに気が付き、自分達ができることは何か考えていた。

『他者との学びから得た終末期ケア技術』では、〈意思決定支援〉、〈緩和ケア〉、〈発達段階に応じた終末期ケア〉、〈予期悲嘆への援助〉といった4つのサブカテゴリーがあった。学生は、グループの学生と意見交換をすることや、終末期ケアを実践している看護師から話を聴くこと、課題の報告会で他の学生の発表を聴く中で、終末期ケアに関連する主要な課題について学んでいた。〈意思決定支援〉では、意思決定をする際には患者の意思が重要であることを学び、患者から死生観や価値観についての話をうかがうことの必要性を感じていた。また、課題レポートの中では、安楽死やアドバンス・ケア・プランニングについて調べ、記述している学生もいた。

(2) 医療者に必要な心構え

【医療者に必要な心構え】では、『終末期ケアの経験が看護師に与える影響』、『看護師の姿勢』、『チーム医療の大切さ』といった3つのカテゴリーが抽出された。『終末期ケアの経験が看護師に与える影響』には、〈看護師の死生観を磨く〉、〈経験の積み重ねによる成長〉、〈思うように関われないジレンマ〉、〈精神的負担〉といった4つのサブカテゴリーがあり、看護師が終末期ケアを経験することは、看護師としての成長につながる反面、負担感やジレンマといった課題も抱えることを学生は学んでいた。その解決方法として、『チーム医療の大切さ』でみられたような、〈お互いに支え合い医療者の負担を緩和する〉、〈他職種連携により患者や家族を支える〉ということが重要であることも考えていた。

『看護師の姿勢』には、〈真摯に患者に向き合う〉、〈患者の気持ちを優先的に考える〉、〈適度な距離感を保つ〉、〈個別性のある関わりを大切に〉、〈最後まで人として接する〉といった5つのカテゴリーが抽出された。学生は、終末期ケアを学ぶ中で、将来看護師になった時にどのようにすれば良いのかについて、常に考えていた。

(3) 学びの発展

【学びの発展】には、『看護への興味の高まり』と『体験の意味づけ』という2つのカテゴリーが抽出された。『看護への興味の高まり』では、〈将来の看護師像をイメージする〉、〈終末期ケアへの興味・関心を持つ〉、〈看護の素晴らしさや難しさを実感する〉といった3つのサブカテゴリーが抽出された。学生は、課題を進める中で、看護や終末期ケアに興味を持ち、どのような看護師になりたいか考えたり、改めて看護の素晴らしさについて考えたりしていた。『体験の意味づけ』では、〈身近な人の死を思い出し家族ケアを考える〉、〈実習を振り返り終末期患者への関わりを考える〉といった2つのサブカテゴリーがあり、学生は学んだことを自分の体験を通して状況を解釈し、新たな学びにつなげていた。

V. 考察

終末期看護に関する講義に探求学習を取り入れることにより、学生が他の学生と協力しながら、主体的に学習する様子がみられた。今回の結果から、終末期ケアのどのような内容が学べたのか、探求学習を取り入れ、どのような効果があったのかについて考察する。

1) 終末期ケアの学び

看護学士課程の教育は、看護師の免許を取得するという側面と看護学士としての能力を培うという側面がある。そこで、看護学士課程教育のコアコンピテンシー（日本看護系大学協議会, 2018）に示されている終末期ケアに関連する内容と、看護師国家試験出題基準に示されている終末期ケアに関連する内容と照らし合わせ、今回の学生の学びについて考えた。

看護学士課程教育のコアコンピテンシー（日本看護系大学協議会, 2018）では、「エンドオブライフにある人と家族を援助する能力」が必要であるとされ、「人の死と死にゆく人とその人を愛する人の全人的苦痛を軽減・緩和し、死にゆく人の意思を支え、その人らしくあることを援助する方法を修得することが求められている。」と述べられている。また、看護師国家試験の出題基準（厚生労働省, 2018）においては、臨死期の看護、グリーフケア、死亡後のケア、緩和ケアを必要とする患者と家族への看護、症状アセスメントとマネジメント、

表3：学生の学び（患者や家族に必要なケア）

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なデータ
患者や家族に必要なケア	家族ケアの必要性	家族とも信頼関係を築く	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師が患者のみならず、家族のケアも行うことを家族に伝えること、何気ない日常会話をすることや話しかけやすい雰囲気を作ること、これらは、家族との信頼関係を作るための歩み寄りの方法であった。このような家族へのコミュニケーションは家族との信頼関係を形成する上で重要であると学んだ。 ・家族支援において、ありのままの家族の形を受け入れることや家族との信頼関係を形成することは重要であると分かった。
		家族の介護負担を知り緩和する	<ul style="list-style-type: none"> ・患者のケアを家族とともにを行う際には、患者だけでなく家族も疲労しないような方法を用いることが重要であり、家族が実施可能なケアを探してなるべく容易に実施できるように関わるために、看護師の卓越した知識と看護技術が必要であることが分かった。 ・ほとんどの終末期がん患者の家族の多くは何らかの苦痛を抱えており、看護師は患者だけでなく、家族に対するケアも重要視しなければならないことを学んだ。
		家族の気持ちを支える	<ul style="list-style-type: none"> ・終末期がん患者だけでなく家族に対するアプローチも重要であり、特に患者との縁が深い家族に対しての関わりは、家族を失う悲しみの軽減に大きく作用することを学んだ。 ・終末期患者の家族の特徴について、家族の一員が終末期のため入院するという事は、家族を失うことへの精神的苦痛や看病の負担、死別後の不安など、多大な苦悩を患者家族は体験すると考えられる。
		患者と家族をつなぐ	<ul style="list-style-type: none"> ・（小児の終末期ケアについて）親が親としての葛藤を感じていないか、自分自身の気持ちや考えをどう捉えているのか、親の価値観・信念など捉えつつ、家族とともに子どもにとって何が大切なことであるか話し合うことが重要である。 ・患者だけでなく、家族との関わりも行い、患者の様子や状態を伝えることや、患者に対するケアの中で家族ができることを一緒に行うなど、患者と家族の関係をつなぐ役割も看護師は担っていると考える。
	他者との学びから得た終末期ケア技術	意思決定支援	<ul style="list-style-type: none"> ・終末期の患者へのケアとして、意思決定支援は看護師の大きな役割の一つであり、アドバンス・ケア・プランニングを行うことの重要性を知ることができた。 ・今までは患者のニーズを会話の中から知り、その患者の希望に沿って看護を行うと学んできたが、意思決定支援では患者から死生観や価値観を教えてもらうことが大切であると学んだ。
		緩和ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・何気ない会話も患者にとって精神的苦痛の緩和になることを知り、看護が持つ力の幅広さを感じた。 ・呼吸器疾患の患者では、終末期の苦痛として呼吸困難が高く出現するため、呼吸困難を増強させる要因へのケアが重要である。呼吸困難を増強させる要因としては、孤独感や死の恐怖など治療で改善するものではないため、専心や寄り添うことなど、尊厳を第一とした人間対人間の看護が大切であると学んだ。
		発達段階に応じた終末期ケア	<ul style="list-style-type: none"> ・小児に対するターミナルケアの現状についての発表を聞いて、ターミナル期であっても成長していることを忘れてはいけないことを聞き、それは小児のターミナルケアを通して一番大切なことであり、一番忘れてはいけないことだと思った。 ・死産した児や夫婦がお互いに向き合うためには、ペリネイタルロスへのケアが重要であることを学んだ。
		予期悲嘆への援助	<ul style="list-style-type: none"> ・死別体験者の悲嘆の回復には、家族が精いっぱい患者の看病ができたかどうかの影響するといわれていることから、家族の予期悲嘆を促進し、死別後の悲嘆への援助へとつなげていくことが分かった。 ・予期悲嘆とは、喪失が予期されたときに死別したときのことを想定して起こる悲嘆反応であり、4つの心理的局面を行き来しながらたどっていくことを学んだ。

表4：学生の学び（医療者に必要な心構え）

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なデータ
医療者に必要な心構え	終末期ケアの経験が看護師に与える影響	看護師の死生観を磨く	<ul style="list-style-type: none"> ・がん患者家族のニーズや思いと看護師の体験による成長は、うまく循環しながら看護師の死生観を磨くとともに、より良い看護に活かされている。 ・患者・家族の悲痛を看護師が受け止めケアしていくには、看護師自身が死生観を磨くことが必須である。
		経験の積み重ねによる成長	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師は終末期の患者家族との関わりの積み重ねで、さらなる成長ができるということを学ぶことができた。 ・終末期がん患者や家族への支援は、看護師が満足できる内容であろうがなかろうが、成長の機会を得る貴重な体験となっていることを学んだ。
		思うように関われないジレンマ	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師も患者に出来るだけ関わりたいが、他の業務等により多く関わることができないジレンマがあるということを初めて知った。 ・看護師は常に業務に追われ忙しいため、がん患者や家族に関わりたくても思うように関われないといったジレンマを抱えており、患者、家族に対するケアのやりきれなさや、後悔を感じている場合があることを学んだ。
		精神的負担	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師は患者との距離を適度に保つことが大切であり、また、患者の最期を迎えるだけでも相当なストレスを感じるのではないかと思います、自分自身のストレスコントロールをすることも大切ではないかと感じた。 ・ターミナル期では、ケアを行っていた患者が亡くなると、看護師側の精神的負担も大きいように感じたために、看護師側のケアも重要であると考えた。
	看護師の姿勢	真摯に患者に向き合う	<ul style="list-style-type: none"> ・(看護師は)時には死という話題にも触れ、患者のこと、その家族のことを思い、真摯に患者と向き合うことが大切であると改めて感じた。 ・患者と真摯に向き合い言葉遣いに配慮しながら真実を伝えていくこと、最期の過ごし方を考えていくことができるようにサポートしていくことが、どれほど看護職者の役割として重要か気づくことができた。
		患者の気持ちを優先的に考える	<ul style="list-style-type: none"> ・(看護師は)いつも患者の思いを優先的に考えた行動をしている。このような面を持つことは、私にも必要なことであり、これからももっと身につけていかなければならないものであると感じた。 ・患者様の身体面だけでなく家族の気持ちや意思、患者様の趣味や価値観など大切にしているものなどにも目を向けることの必要性を考えることができた。
		適度な距離感を保つ	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師として患者様と関わる上で、もちろん寄り添うことも大切ではあるが適度な距離感を保つことが、ご家族に対しての十分なケア実施や自分自身を守ることもつながるのではないだろうか。 ・ケアを行う際に、看護師は感情を整理し、意識して子ども自身と向き合い、子どもに向き合う姿勢を持つことが必要である。
		個別性のある関わりを大切に	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師自身も患者と関わる時は、教科書どおりの関わりではなく、その患者に合わせた個別性のある関わり方が必要であると学んだ。 ・エンゼルケアについて学び、ご遺体にも個別性を大切にされたケアが大切であると感じた。
		最後まで人として接する	<ul style="list-style-type: none"> ・人は亡くなった瞬間から、生体から死体に切り替わるものの、ご家族にとつても看護師にとつても「その人」であることには変わりがないため、生前と変わらず尊重し、大切にケアするべき存在であると感じた。 ・エンゼルケアの手順などは決まっているが、「その人らしさ」や「ご家族の想い」を尊重することが大切であると気づき、また、死後であっても、生前と同じようにケアを行うことが大切であると考えた。
	チーム医療の大切さ	お互いに支え合い医療者の負担を緩和する	<ul style="list-style-type: none"> ・ターミナルケアでは、看護師に対する身体的負担だけでなく、心理的負担も大きい。患者を担当する一人の看護師だけがかかわるのではなく、他の看護師や他職種、家族といった患者に関わる全ての人がチームとして関わることで、みんなで共有し、お互いを支えあうことが重要であると考えた。 ・看護師も一人の人間であり、人の死に直面することは精神的に負担がかかる。そんな看護師に対して、一人で抱え込まないように、チームで患者に関わることやデスカンファレンスなどで自分の感情を整理する場や自分がしてきた看護を振り返る場が必要であると学ぶことができた。
		多職種連携により患者や家族を支える	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと家族が子どもらしく家族らしくいられることを支える終末期ケアは、終末期になって始まるものではなく、診断後の継続した子ども、家族、医療チームとの関わりのなかで行われていくものであり、治療過程で形成された子どもと家族、医療チームの信頼関係が基盤となる。 ・患者だけではなく家族や周りの医療従事者たちの関わりが重要であり、その関わりによって患者やその家族がよりよい最期を迎えられるか大きなポイントになってくるのではないかと考える。そのためには患者や家族、他職種との連携が重要であり生前からコミュニケーションを取り、関わりをもつことが必要であると考えた。

表5：学生の学び（学びの発展）

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なデータ
学びの発展	看護への興味の高まり	将来の看護師像をイメージする	<ul style="list-style-type: none"> 今回の課題を通して、終末期にある子どもとその家族、また看護師に必要なケアの方針や関わり方について学ぶことができた。看護師になって終末期の子どもと関わることになった際にはぜひ参考にしながら、子どもとその家族を支援していきたい。 今後の実習や将来働く時に活かし、患者様第一の看護を行えるようにしたいと強く感じた。
		終末期ケアへの興味・関心を持つ	<ul style="list-style-type: none"> この講義を通じてターミナルケアのすべてを学ぶことはできなかったかもしれないが、ターミナルケアの実際について少しは知識を持つことができ、またターミナルケアについて興味・関心を持つ機会となった。 各グループでの発表や実際に現場で働く看護師の方の話により、海外と日本のターミナルケアの実際やエンゼルケアについてなど、講義の中だけでは深く学んでいない内容についてまで知ることができ、興味をもつ機会となった。
		看護の素晴らしさや難しさを実感する	<ul style="list-style-type: none"> 初めはターミナルケアに興味はなかったが、ターミナルケアとは人生にとってとても大切な時期であり、その時期に関わることができる看護師の素晴らしさと共に命の重みを学ぶことができた。 ターミナルケアは看護師が行うことだけを指すことと思っていたが、家族や周りの他職種も大きく関わるものであるという考えに変わり、また私たち看護師はどのようなターミナルケアを行うことで患者や家族にとって良い最期を迎えられるのか考えることは難しいと感じた。
	体験の意味づけ	身近な人の死を思い出し家族ケアを考える	<ul style="list-style-type: none"> 終末期に家族が強い不安状態であったことが、死別後の精神的健康状態に関係する。これは、まさに私の祖母と同じ状態であり、ここに対する看護者の関わりは家族の予期悲嘆を理解し援助することである。 私は入院中の祖母に対して、看護師さんの提案で清潔ケアを、亡くなった後は祖母のエンゼルメイクを手伝わせて頂いたことがある。清潔ケアでは足浴、手浴を、エンゼルメイクは口紅をひかせてもらっただけはあるが、今もその時の経験が「最期に何か祖母のためにできて良かった」と頭に残っている。この時、ターミナルケアやエンゼルケアは家族・看護師が最後にできる患者様へのケアであり、実施することで患者様の負担だけでなく、ご家族の負担も軽減されるのだと感じた。
		実習を振り返り終末期患者への関わりを考える	<ul style="list-style-type: none"> 今までの実習では自分のケアは間違っていないと自分を擁護するようなケア、また自分中心のケア計画を立てていた。しかしそれは看護者側の都合であり、患者様のための看護ケアにはならない。自分自身このような経験があったため、講演を聞き一番強く心を打たれたところであった。 在宅実習では、ALSの終末期の患者を受け持ったが、一人の看護師が訪問するのではなく、看護師も曜日によって違う人や、訪問介護や訪問歯科など様々なサービスを利用していた。また、看護師は朝礼の際、患者の状態や今後のケア介入のやり方などを看護師全員で話を行い、一人に負担が大きくなりすぎないような仕組みになっていた。看護師一人一人の負担を軽減し、チームで一人の患者と関わるということが重要となってくるということを学んだ。

全人的苦痛のアセスメントとマネジメント、苦痛緩和と意思決定支援、予期的悲嘆に対するアセスメントとケア、アドバンス・ケア・プランニング、家族ケア、終末期にある子どもと家族への緩和ケア、死産や障害がある新生児を出産した親のケア、在宅における終末期看護、といった内容が看護師になるために必要な学習内容とされている。看護師国家試験に関連する内容は、今回実施した「ターミナルケア論演習」以外でも、各領域の講義で教育されていたり、「ターミナルケア論演習」で実施した講義に含まれていたり、学生が学ぶ機

会は得られている。学生の学びの結果と照らし合わせてみると、【患者や家族に必要なケア】において、看護師になるために修得しておく内容が含まれていた。特に『家族ケアの必要性』においては、4つのサブカテゴリーが抽出されており、学生が関心を持って学んだことがうかがえる。講義などで家族ケアの必要性は伝えられていても、実習や演習において、家族に直接ケアを提供する場面は多くない。一部の学生は、身近な人の死を経験しており、その体験を思い出し、家族にどのようなケアを行うことが望ましいのかについて考えてい

た。家族の死の体験が終末期看護への関心を高めると言われているように（小濱ら, 2014）、体験と知識が重なることで、学習への興味が高まることがある。今回の場合は、家族の死の体験がない学生も、実践をしている看護師の講演で、実際の事例についてリアリティを持って語ってもらえたことで、看護師が家族にどのように接するのかイメージすることができ、家族ケアに対する学びが深まったのではないかと考える。さらに、小児のターミナルケアについて文献から調べた学生の発表では、家族と共に患児をみることの必要性が述べられていた。特に、きょうだいへのサポートの重要性が強調されていた。このことから、患者だけに目を向けるのではなく、周囲の人々のケアも自分達が対象とする存在であることを認識したのではないかと考える。

今回の結果より、学生は【医療者に必要な心構え】も学んでいた。看護学士課程教育のコアコンピテンシー（日本看護系大学協議会, 2018）で示されているような、死にゆく人とその家族を支えるためには、看護師自身の人々に関わる姿勢が問われる。このことを学生は認識し、どのような姿勢が必要なのかについて、学習をしていた。これは、映像から学びを得た学生の発表で、終末期ケアをしている看護師の関わり方の紹介があったことや、終末期ケアを実践している看護師の語りの中で、どのように患者や家族に接しているかについて具体例が述べられていたことから、学生の学びにつながったと考える。学生は看護師の姿勢のみならず、終末期の患者へ関わることで、どのような苦悩があるのかについてもレポートの中で言及していると同時に、その対策としてのチーム医療の必要性について調べていた。中西ら（2012）の報告でも、ターミナル期の患者に関わる看護師の態度に関連する要因について、「多職種を含むチームが問題を認識し、共通の目標に対する情報や考えを共有することによって、チームの中でその問題を解決していくことにつながり、患者に対して真の個別のケアを提供するだけでなく、チームメンバーである看護師も支える」と述べられている。学生は、患者や家族を支えるというだけではないチーム医療の効果について気が付き、他者と共同することの大切さを実感していた。

学生のレポートからは、【学びの発展】に示されているような、学んだことからさらに学びを重ねるといった学びの循環を行っていた。対象が4

年生と看護師に近い立場の学生であったこともあり、将来の看護師像も描きながら学んだことを振り返っていた。

2) 探求学習の効果

探求学習は、アクティブラーニングの方法の1つとされているが、アクティブラーニングを実施することで期待される効果には、知識の習得、学習意欲の喚起、幅広い能力の育成があると言われている（中井, 2019）。幅広い能力には、専門的知識を活用することも含まれる。さらにコミュニケーション能力や倫理観なども育まれることが期待されている（中井, 2019）。また小林ら（2018）は、探求学習の効果として、得られた情報を分析したり評価したりする力、事実を適切に伝達する表現力などが獲得でき、主体性が促進されると述べている。

学生は、知識の獲得はもちろんであるが、看護師としてどのように患者や家族と関われば良いのかまで考えることができている、実践はしていないものの、知識の活用をイメージすることにつながっていたと考える。また、学生により差はあるが、レポートや成果の発表では、得た知識や情報について、そのまま伝えるのではなく、そのことから自分はどのように考えたのかについても述べられていた。このことから、情報を分析したり評価したりする力がつきつつあることが分かる。加えて、看護師にとって重要な倫理観については、学生の学びを見ると、看護師としての姿勢に関する内容がいくつかみられた。学生のレポートからは、「倫理」という表現はなかったが、倫理原則などといった知識として理解するのではなく、具体的な行動として考えることができているため、学生自身は意識していなかったかもしれないが、医療職として必要な倫理についても学んでいたと考える。

最後に、アクティブラーニングの効果で重要な内容である、学習意欲の喚起や主体性の促進について述べる。学生のレポートの記述には、終末期ケアに興味が出てきたと直接的に記載されているものがあつた。主体的な学びの視点の1つとして、田中（2017）は、「学ぶことに興味と関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習課題を振り返って次につなげることが実現できているか」といった点を示している。この点から学生の学びを振り返ると、興味を持つことは出来てお

り、将来看護師になった際の行動についてまで考えることはされているものの、自己の課題を導き出すことは十分にできていなかった。ただ、課題を実施する過程において、はじめは自分で学ぶ内容を設定することに戸惑っていた学生達が、指定した時間以外でも自主的に学習していたり、グループディスカッションを繰り返していたり、楽しんで学習している様子もみられた。このような主体的な学びには、面接を適宜実施し、学生が興味を持っている内容について学習方法をアドバイスする、学びに必要な環境を整える（演習に必要な物品の準備や演習室の確保など）、個人学習をしている学生にはテーマが類似している学生との共同学習を促す、といった教員の関わりも影響を与えていたのではないかと考える。

Ⅵ. まとめ

終末期ケアについて探求学習を取り入れた学習をすることで、学生は、【患者や家族に必要なケア】や【医療者に必要な心構え】を学ぶと同時に、自己の体験を振り返り再学習するといったような【学びの発展】も行っていた。このことから、知識の獲得だけではなく、知識を活用する力や、倫理観の獲得、学習意欲の喚起や主体性の促進といった効果につながっていたと考える。

Ⅶ. 本研究の限界と今後の課題

本調査は、レポート課題の内容から学生の学びを抽出した後、集約し分析をしているため、個々の学生がどのように学んでいったのかについては明らかになっていない。今後の調査においては、個々の学びを丁寧に聴き取り、今回示したカテゴリーがどのように関連しているのかについて検討することで、さらなる終末期ケアへの教授法の検討が期待できる。

謝辞

本調査にご協力いただきました学生の皆さま、講義をご担当下さいました先生方に厚くお礼申し上げます。

文献

- 羽田真. (2017). 新学習指導要領とアクティブラーニング —スーパーグローバルハイスクールの実践を中心に—. 早稲田大学本庄高等学院研究紀要「教育と研究」, 36, 59-69
- 犬丸杏里, 玉木朋子, 横井弓枝, 富田真由, 藤井誠, 辻川真弓. (2018). 看護大学生を対象とした終末期ケアシミュレーションの評価 振返り用紙による質的検討. Palliative Care Research, 13(2), 181-186
- 一般社団法人 日本看護系大学協議会. (2018). 看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標. アクセス2019年8月29日. <http://www.janpu.or.jp/file/corecompetency.pdf>
- 小林忠資, 鈴木玲子. (2018). 看護教育実践シリーズ 4アクティブラーニングの活用. 医学書院. 125-135
- 小濱優子, 滝島紀子, 武内和子. (2014). 終末期看護への学習意欲を高める要因の検討 卒業前の看護学生への調査から. 川崎市立看護短期大学紀要, 19(1), 49-56
- 厚生労働省. 保健師助産師看護師国家試験出題基準平成30版. (2018). アクセス2019年8月29日. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000158926.html>
- 文部科学省 新学習指導要領. (2017). アクセス2019年8月29日. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm
- 森慶輔. (2019). VTR視聴による出生前診断および終末期ケアに関する看護系大学生の意識の変化. 看護学研究紀要, 7(1), 83-94
- 森京子, 古川智恵. (2017). 講義とシャドウイングを併用したがん終末期看護学実習における学び 急性期病院と在宅緩和ケア施設での実習を通して. 日本医学看護学教育学会誌, 26(1), 27-35
- 中井俊樹. (2019). シリーズ大学の教授法3アクティブラーニング. 玉川大学出版部. 9-10
- 中西美千代, 志自岐康子, 勝野とわ子, 習田明裕. (2012). ターミナル期の患者に関わる看護士の態度に関連する要因の検討. 日本看護科学会誌, 32(1), 40-49
- 田中博之. (2017). アクティブ・ラーニング「深い学び」実践の手引き. 教育開発研究所. 15

